

浄楽寺 総合調査報告書 浄楽寺説明会の記録

— 調査経緯、建築 —

2024年10月26日 場所：浄楽寺本堂

言い伝えを元に調査へ

橿原市が「飛鳥・藤原の宮都」のユネスコ世界文化遺産登録に向け頑張っている中、ここ中村のある地域も聖徳太子との関係でキーポイントになるのではないかと思います、また父からも浄楽寺再建のことは聞いていたので、今回浄楽寺を調査してもらって報告書を作りました。

私にもまだわからないことがいっぱいあるので、今日は調査した皆さんから調べたことの中から概要を、皆様にまず、発表していただきます。

今回の報告書はあくまでも中間点として考えています。今後 50 年間にまた新たな発見があるかもしれません。楽しみです。

(浄楽寺檀家惣代 大西甚吾)

あいさつ

今まで何度も何代目の住職かと質問される機会がありましたが、今までわかりませんでした。が、今回の報告書で14代とわかりました。今後、寺についての質問があった際には報告書を活用したいと思います。

調査関係者のみなさんありがとうございました。

(浄楽寺住職 近藤正暢)

建築について

多武峯と中村

中村で最初に浄楽寺のことを聞いたときに、「帰りの草鞋【ぞうり】を腰に大八車で多武峯に向い、本堂の材料を運んだ」と教えていただきました。

まず、浄楽寺に関する過去の文献として、1987『橿原市史』や1985『奈良県の近代社寺調査報告書』に掲載されています。半世紀近く前に、すでに数あるお寺の中で選ばれた建物であったことがわかります。

特に近世社寺調査報告書では、浄楽寺は重要な文化財で、輪蔵を運んで建てた本堂であると書かれています。

次に、多武峯と中村の関係を探りました。江戸時代の幕末ごろの談山神社の絵図の一枚をご覧ください(8頁)。今回の調査報告書では、妙楽寺旧子院である般若院の舟橋さん(現在の伏見稻荷神社の宮司)から絵図の画像を提供していただきました。

本殿に向かう石段の下に「中村 吉川長四郎」と刻まれた石灯籠を発見しました。吉川家のご先祖が18世紀に石灯籠を奉納されています。中村のとのご縁がここにあったわけです。この石灯籠を奉納した経緯について、村の方でご存知の方には教えていただきたいものです。

時は移って明治維新後の廃仏毀釈【はいぶつきしゃく】で仏教色の強い建物のひとつとして多武峯妙楽寺の輪蔵【りんぞう】も壊してしまうことになりました。輪蔵というのは、お経を納めた回転する棚(転輪蔵)のための建物です。

明治のはじめに解体された輪蔵を明治15年に中村の皆さんが購入し、村に運んで、浄楽寺本堂として再建させたことがわかる貴重な記録が大西家にのこっています。

輪蔵と本堂の違い

江戸後期の絵図から多武峯にあった頃の輪蔵の姿をご覧ください。浄楽寺と屋根の形などいろいろ違うのがわかります(8頁)。

どこが違うのでしょうか。



浄楽寺のような真宗寺院の本堂の特徴として、皆さんが座っておられる外陣と仏様がいらっしゃる内陣があり、また浄土真宗の本山でそうなっているように、内陣の後ろには、僧がお勤め（内陣出勤）をするための出入り口があります（後戸形式）。



つまり輪蔵の部材を利用して浄土真宗のお堂の形式に変えて再建されているのです。

当時の輪蔵の屋根は、おそらく檜皮葺きであったと思われませんが今は瓦葺です。また輪蔵は土足で入る形式でしたが、こちらの本堂では床を張り、縁【えん】を回しています。

ここに輪蔵と浄楽寺本堂の姿を想像図ですが示します。

柱や組物、棧唐戸、柱の下の礎石・礎盤は明らかに再利用されていると思われます。絵図にある側面の花頭窓【かとうまど】が浄楽寺の内陣に4つ使われているようです。正面両脇の障子の敷居には花頭窓の跡が残っていますのでご覧ください。

全部で12本の輪蔵の丸柱を使っています。外陣から見えるところで10本使い、内陣奥でさらに2本使っています。直径30cmほどのケヤキの柱には輪蔵が2-300年前の建物だった証拠として風雪に耐えたあとが残っていますのでご覧ください。

謎の大欄間

輪蔵の部材を使って浄楽寺の本堂は真宗寺院らしく整いましたが、ほかの真宗寺院にない特徴があります。入り口の大欄間です。唐松を中心に、鳥や花をあしらった立体的な透かし彫りが入口の上に使われている真宗寺院は他にないと思います。

ちなみに二羽の鳥の名前は「吐綬鶏」【とじゅけい】で、おめでたい瑞鳥【ずいちょう】のひとつです。子供が大きくなると親にエサを与える、ともいわれています。



なぜここにこの大欄間があるのかまだわかりませんが、建築の装飾彫刻に詳しい鳴海祥博先生が仮説を立てていただいています（80頁～）。

鳴海先生の大欄間の第一印象として金沢にある成巽閣【せいそんかく】の書院の欄間を例に出されました。こういった場で見かける欄間の片方ではということです。

そうなる次の疑問として、この書院の欄間がなぜ輪蔵の部材とともに中村に運ばれたのでしょうか。そこでもうひとつの仮説は、輪蔵にこの欄間が他から持って来て使われていたのではないかと、です。ご覧のように今回の調査で大欄間の内側の板を外したところ内側に彩色がありませんでした。

つまり元々御殿や客殿といった位の高い書院の欄間を、輪蔵内部を飾るために転用したのではということです。このとき欄間の見える面のみを彩色したため背面が素木【しらき】のままとなっていたものを、明治になって浄楽寺本堂に利用するとき彩色面を外側にして嵌め、背面を気で覆ったのではということです。この欄間の数奇な運命は未だ謎のままです。

もうひとつの欄間

いっぽう、浄楽寺にはもうひとつ欄間があります。内・外陣の境の欄間です。史料から本堂の前身は天明4年（1784）に建っていますので、築後100年ぐらいの明治期に建替えたときに、前の本堂の欄間を再利用したのではと想像しています。牡丹と山鶴【さんじゃく】という瑞鳥が主題となった真宗寺院らしい欄間です。ただ旧本堂と間口が合わない分を両端で天女の絵欄間で補っているところに再建時の苦勞がみられます。



今後この報告書の効果で研究が進んで、大欄間の相手（片方）がまだどこかに見つかるかもしれないので、今回浄楽寺のHPも立ち上げて情報を寄せてもらうことにしています。

この本堂には他にもたくさん謎があります。50年後も生きてらっしゃる方は、ぜひその答えを見届けてください。

（稲上建築設計事務所 稲上文子）

